

# 地域とともに次の世代へ

## 暮らしに息づく生物多様性

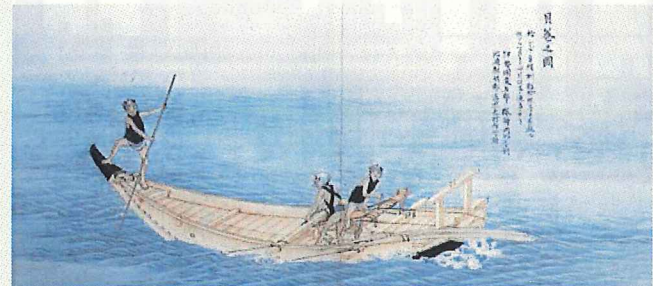
かつて、木曾三川の河口域には、藻場や干潟が広がっていました。海は四季折々の恵みをもたらし、伝統ある漁師町の繁栄を支えてきました。

### 多様な漁獲物と漁業の多様性

「三重県水産図解」には、約130年前の当時、三重県で営まれていた漁労の様子や漁獲物が生き生きと描かれています。この資料によると、木曾三川河口域では、タイ、クロダイ、スズキ、タコなど30魚種以上が捕獲されていました。また、漁獲物に応じて多様な漁法が工夫されていました。



出典：三重県水産図解



貝巻の図：約130年前のハマグリ漁の様子

出典：三重県水産図解

しかし、昭和30年代以降、漁場環境の変化とともに、多くの漁業が衰退しました。現在はアサリ、ハマグリ、シジミの採貝漁業、シラウオ漁、ノリ養殖が中心となっています。

漁業の種類	対象魚種	漁法	漁獲量
鱈漁業	イワシ、スズキ、サケ	曳網	100, 200, 300, 400, 500
大目漁業	メダイ	投げ網	100, 200, 300, 400, 500
サケ漁業	サケ	投げ網	100, 200, 300, 400, 500
タイ漁業	タイ	投げ網	100, 200, 300, 400, 500
クロダイ漁業	クロダイ	投げ網	100, 200, 300, 400, 500
シジミ漁業	シジミ	採貝	100, 200, 300, 400, 500
アサリ漁業	アサリ	採貝	100, 200, 300, 400, 500
ノリ養殖	ノリ	養殖	100, 200, 300, 400, 500
シラウオ漁業	シラウオ	採貝	100, 200, 300, 400, 500
ハマグリ漁業	ハマグリ	採貝	100, 200, 300, 400, 500
シジミ漁業	シジミ	採貝	100, 200, 300, 400, 500

漁業の変遷

出典：海で生きる赤須賀

### 現在の漁の様子

時代が変わっても、木曾川河口域の恵みは、地域に暮らす人々にとって、先祖から受け継ぎ未来に繋ぐ財産です。そのような想いから現在も漁が続けられています。



(左)現在使われているじょれん(中上)活ハマグリ(中下)シラウオとアユの稚魚、地域の方に旬の味覚として親しまれている(右)ハマグリ漁

### 桑名のハマグリ



日本一の生産量を誇った桑名のハマグリは、殻が大きく淡美な味わいを特色とし、徳川家康を初め歴代将軍に献上されてきました。また、色彩の美しい殻は貝合・貝絵・膏薬の容器に加工されました。「桑名のハマグリ」は一漁獲種としてだけでなく、伝統文化の一端を形成してきました。

貝絵

## 自然再生への取り組み

干潟の創出～生息場の提供～と、稚貝生産、種苗放流～育てる漁業～の相乗効果により、干潟に生き物のにぎわいが取り戻されつつあります。

### 多様な主体による取り組み

木曾三川河口域では、1960年代には年間5000tものハマグリが漁獲され、日本一の漁獲量を誇っていました。しかし、1985年以降、漁獲量は年間100t未満に急減しました。

このため、「桑名のハマグリ」の再起をかけて、三重県、赤須賀漁協、桑名市により、ハマグリ種苗生産と人工干潟への放流が行われています。

また、地域の小学生とともに放流活動や干潟の生き物調査などに取り組み、次世代を担う子どもたちに干潟の大切さを伝えています。

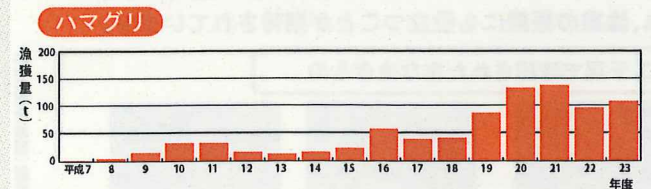


漁師さんは先生です

焼ハマグリを楽しむ

### 漁獲量の回復

自然再生の取り組みや、厳しい漁獲規制や種苗放流により、近年のハマグリ資源は増加傾向にあります。



### 勉強会の開催

人工干潟をはじめ、木曾三川河口域での環境情報および水産資源情報に関する勉強会を開催することで、漁業者及び行政間での知見を共有するとともに、良好なコミュニケーションの形成に役立っています。



現場視察会の状況

STOP! THE 移入種!

アサリなどの二枚貝を食するサキグロタマツメタは、放流アサリへの混入により分布域を拡大してきたと考えられています。現段階では、伊勢湾での被害は確認されていませんが、東日本では深刻な漁業被害が生じています。アサリなどの資源保護のために、移殖放流を制限したり、成貝や卵のうが発見された際には積極的に駆除することが求められています。



軟体部を広げたサキグロタマツメタ。二枚貝の殻に穴をあけて捕食します。



被害を受けたアサリ

# 生きものと人がにぎわう浜づくり

～木曾三川河口域の干潟再生の取り組み～

## 国土交通省中部地方整備局 木曾川下流河川事務所



# 木曾三川下流域での干潟再生への取り組み

## 産業構造の変化と藻場・干潟の減少

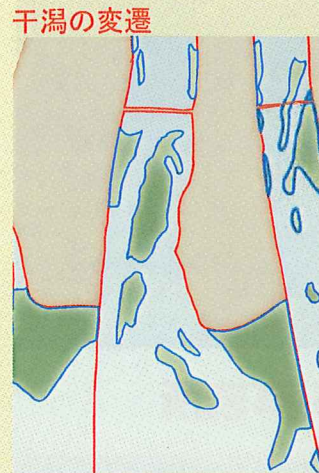
海の豊かな恵みをもたらす木曾三川下流部での暮らしは、度重なる水害を克服してきた歴史でもありました。昭和34年には伊勢湾台風が東海地方を襲うなど、近年も大きな被害が発生しました。このため、高度経済成長期以降、安全対策として防潮堤が建設されました。同時に経済発展を支える農地や工業用地の確保のため、干拓や埋め立てが進み、産業活動に必要な地下水の汲み上げは地盤沈下を引き起こしました。



昭和22年  
河口域には広大なデルタが広がり、藻場や干潟が豊かな海を育てていました。



平成3年  
干拓や埋め立て、地下水の汲み上げによる地盤沈下など、産業構造の変化に伴って、河口域の藻場や干潟は激減しました。期を同じくして漁獲量も減少の一途をたどりました。



往時の赤須賀漁港  
桑名1984の想い出写真集



現在の赤須賀漁港  
(2014)

## そして今… 新たな挑戦のはじまり



### 約20haの人工干潟を造成

木曾三川河口域では、干潟の減少により生物種が減少しました。そこで、生物多様性を取り戻すために、当時、自然再生という概念がほとんど普及されていない中で、建設省としては他に先がけて地元関係者と連携を図り、長良川の浚渫土を有効利用し城南沖と長島沖に置いて、面積約20haの人工干潟を2箇所造成しました。



### 継続的なモニタリング調査の実施

城南沖干潟と長島沖干潟では、人工干潟造成直後の平成6年からモニタリング調査を継続的に行ってきました。調査では、造成後の地形の変化や、生き物の生息場の条件となる底質の状況、魚類や底生動物のほか、干潟を利用している野鳥などの生き物の状況について調べています。

私たちは便利で一眼豊かに思える暮らしとひきかえに、海の恵みを失ったことに気づきはじめました。海の恵みを次世代にまでつなげていくことは、重要なことです。

手遅れになる前に、もう一度干潟をよみがえらせ、人と海のつながりを取り戻す。私たちの挑戦です。

### 干潟創出の効果

干潟を創出することにより、魚介類の生息環境が創出され、漁業の振興にも役立つことが期待されています。

#### 人工干潟で確認された主な生きもの



#### 干潟の主な生息種【春季】

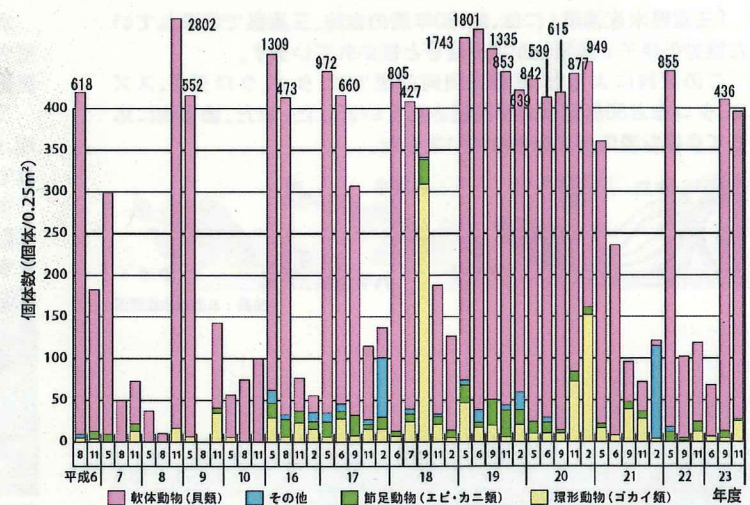
干潟周辺	干潟上(碎波帯・冠水時)
アカエイ	コノシロ
ヒイラギ	カタクチイワシ
スズキ	シラウオ
キチヌ	ウグイ
クロダイ	トウゴロウイワシ
クロウシノシタ	メナダ属
	ボラ科
	スズキ
	シロギス
	クロダイ
	マハゼ
	ウキゴリ属
	ヒメハゼ
	ハゼ科
	ナベカ
	コチ
	イシガレイ
	クロウシノシタ
	トラフグ属
	ハマグリ、アサリ
	イシガニ
	モクスガニ
	タイワンガザミ
	ガザミ
	モクスガニ
	産卵のため降海

注 1. 青字：稚魚のみを確認した種、赤字：成魚のみを確認した種をそれぞれ示す。  
2. 魚類は全種、魚類以外は水産上の有用種を表記している。

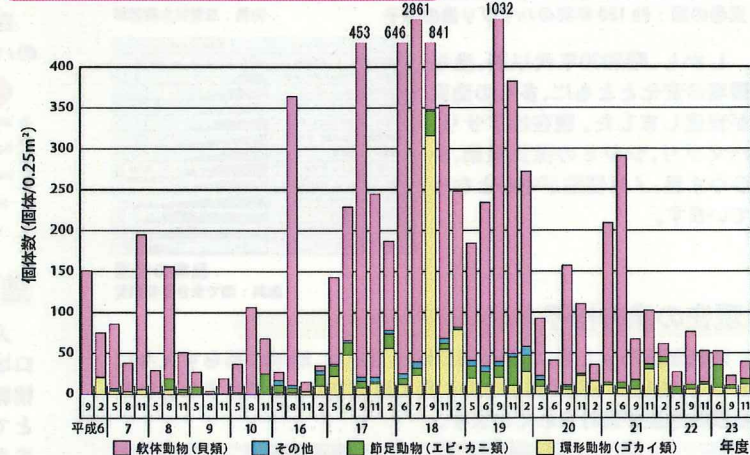
### 人工干潟造成の効果の確認

干潟の造成後18年が経過し、地形や底質は概ね安定した状態が保たれています。その結果、造成した干潟が多様な生物の生息場として機能していることを確認しています。

#### 底生動物個体数の経年変化(城南沖干潟)



#### 底生動物個体数の経年変化(長島沖干潟)



#### 出現数の経年変化

